

子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試み（1） －保育者養成課程学生による絵本を用いた取り組みより－

An Attempt to Encourage Children to Play Handmade Musical Instruments Actively (1) :
Through the Introduction of Picture Books by the Students Majoring in Childcare

山 本 敦 子
Atsuko Yamamoto

（要約）

子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試みとして、2017年に児童館で保育者養成課程学生による絵本を用いた実践を行った。方法として、活動の中心に絵本を据え、絵本の読み聞かせに合わせて子どもたちと学生が手作り楽器による音響を付けて発表を行う「視覚型」「参加型（協同創造型）」発表会を考案し実践した。実践後、学生同士の学び合いを促すために振り返りシートを学生自身に分析と考察をさせ、また、保護者へのアンケート調査も踏まえて本実践の意義と課題を検討した。結果、今回的方法は当初のねらいを部分的に実現しうるものであったが、発表会に向けて子どもの能動性や取り組みの質をさらに高めるためには、幼児から小学生までの「発達段階」に見合った方法やグループ編成、声や音の行き届く「環境」、身体表現のための「スペース」への配慮が必要であったことが明らかとなった。

（キーワード）

児童館、手作り楽器の演奏、絵本、保育者養成、参加型発表会

1. 課題の所在と本研究の目的

（1）課題の所在

筆者の担当する保育者養成課程学生対象のゼミナールの授業では、2016（平成28）年に県内の児童館において、幼児から小学生までの子どもと保護者を対象に、手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践に取り組んだ。そして、実践後に学生の学びや授業の成果を把握するための質問紙調査より結果分析を行い、保育者養成課程における本授業実践の意義と課題について考察を行った（山本2017、2018）。この実践での制作援助過程では、学生は子どもの心情や育ちを読み取り、知的・技能的側面に配慮しながら、共感的な態度で個に応じた援助が行えるように努めていた。このことは保育を実践する際に必要な行動的側面の力量としても相通ずる部分があり、本授業実践の意義の一つとして見通しを得ることができた。一方、課題として浮き彫りになったのは制作後の演奏体験の進め方である。演奏活動の場面では、「音遊び」と「子どもの歌に合わせた合奏」の一斉活動を行い、最後に子どもたちのそれぞれ好きな楽器で、歌に合わせて自由に演奏する活動を行った。この活動進行についての学生の事後評価は全体では肯定的評価11名（61%）否定的評価が7名（39%）であり、否定的評価の理由として、活動の楽しさを感じさせたり子どもたちの意欲を引き出したりするための演奏方法の伝達や発展方法の工夫が不足していたことが挙げられた。

（2）本研究の目的

直径 20cm の円筒型スチール缶に風船を張って作る風船太鼓は、鼓面となる風船を叩いたりつまんだりして音を楽しむことができる。缶の中に米粒などを入れるとマラカスのような用途にもなる。そのとき行った風船太鼓による音遊びの実践では「たたく・つまむ・振る」などいろいろな奏法で音を鳴らし、実際に自分たちの作った楽器がそれぞれどのような音が出せるのかを聴いた。そして「大きな太鼓」の歌に合わせて「たたく・つまむ」奏法で音の強弱を表現し、「アイアイ」の歌に合わせて「振る」奏法で腕を上下左右に動かす動作も楽しむ合奏活動へと展開した。子どもたちは学生の指示や模範演奏に興味を示し、動作を真似ながら音を鳴らして楽しんでいる様子であったが、楽器としての限度もあり、音楽的な発展はそれ以上望めなかった。学生は事後の振り返りにおいて、活動を効果的に進行するための方法として「表情や態度」「演奏方法の伝達・発展」「演奏方法の選択・変更」「声量」「言葉掛け（話しか方）」「曲の選択」を挙げ、子どもたちが「安心して活動に参加する」「合奏方法を理解する」「活動の楽しさを感じる」「一体感を共有する」ことができるような働きかけが必要であったことを述べている。

手作り楽器を用いた「音遊び」と「子どもの歌に合わせた合奏」は保育の場でもよく行われる活動であるが、現場では保育者と子どもとの安定した関係のもとで、材料収集から制作後の発展的活動まである程度の時間をかけて継続的に進めることができる。ところが児童館において、1回きりのイベントとして学生たちが初めて出会う子どもや親子を対象に一斉に推し進めていくとなると、子どもたちが「安心して活動に参加する」「合奏方法を理解する」「活動の楽しさを感じる」「一体感を共有する」ための時間や関係性、学生の音楽実践スキルにどうしても制約が生じてしまう。このような限られた条件のもとでも、子どもたちの「作ってみたい」「鳴らしてみたい」という興味や意欲を引き出し、その場にいる皆が一体感を共有できるような演奏体験を生み出すにはどのような方法が有効であろうか。そこで、新しい学年を迎えた 2017（平成 29）年度のゼミナールの授業ではこれらの課題解決に向けて検討を重ね、次章に示すような新たな方法で再び実践に臨むことにした。

2. 新たな方法考案の糸口

新たな方法を模索する中で筆者が注目したのは、同じく限られた時間や関係性の条件下でも参加者の需要と満足度が比較的高い、子どもや親子向けのコンサートの実施方法である。子育て支援の普及や少子化に伴う教育サービスの対象年齢の低年齢化などを背景として、コンサートの聴取対象者が子どもや親子、乳児や妊娠中の母親にも広がり、その手法も従来のクラシック音楽に見られたような、演奏者から聴衆に一方的に演奏を提供する「鑑賞型」コンサートから、演奏者の演奏や進行に聴衆が何らかの形で関わる「参加型」コンサートへと裾野を広げてきた。とくに近年は音楽アウトリーチ活動⁽¹⁾の一環で、演奏の専門家が保育や教育の現場に赴いて音楽普及を目指した芸術活動を行う機会も増えたことにより、子どもや親子対象のコンサートを聴衆参加型で行うことの事例や意義も検証され（山内 2016、長崎 2016、荻原・木村 2018 など）、このような手法はより一層定着してきているようである。さらに、教育学部学生による小学校での参加型音楽コンサートの企画実践を試みた先行事例（管 2008）では、演奏場面で子どもたちの身体表現や歌唱を取り入れることにより、演奏者と鑑賞者が境界を越えてともに音楽の協同創造の担い手となる「協同創造型」コンサートの可能性も新たに提案されている。

このようなコンサートにおいてもう一つ顕著であるのは、音楽を聴覚集中的に捉えるのではなく、多感覚的にとりわけ視覚媒体を利用して聴衆に音楽受容を促進する方法である。演奏中にスクリーンに映像を流したり、ダンサーによる舞踊を取り入れたりすることもその一例であるが、なかでも幼児対象のコンサートで多く見られるのは、絵本や紙芝居を用いてその内容に合うような音楽表現を生演奏で提供する方法である。筆者が過去に聴取したいくつかのコンサートにおいても、舞台上のスクリーンに映し出された絵本に合わせて朗読と演奏が行われ、イメージ豊かな展開に会場の子どもたちが一体となって楽しんでいる様子が見受けられた。また上演中に、子どもや保護者を舞台に上げて役の一部を任せたり、客席から一斉に掛け声をかけさせたりするような方法も、子どもや親子が臨場感を持ってストーリーを味わい、共有するためにより良い効果を放っていた⁽²⁾。

保育者養成課程学生の音楽スキルは音楽専攻学生やプロの演奏家のように高くはなく、完成された音楽パフォーマンスを安定的に提供することは難しいが、手作り楽器の魅力はその音の素朴さや自分で作った楽器への愛着感にある。その魅力こそを生かしうるような活動として、先の事例のように1冊の絵本を皆で共有し、絵本に手作り楽器で効果音を付ける取り組みを通して子どもたちの演奏体験を能動的に導くことはできないか。そしてその演奏体験を子どもたちによる「参加型」のコンサート、あるいは学生と子どもたちによる「協同創造型」のコンサートとして位置づけ、保護者の前で実演することで、限られた条件下でも一体感を伴った豊かな音楽イベントを実現できるのではないか。このような考えをもとにゼミナールの授業において、音にちなんだ絵本、効果音を付けられそうな絵本の選定を始めたことにした。

3. 絵本の選定

今回のイベントでは、前回制作した3種類の楽器のうち、奏法が簡単で音色も良く、一般家庭では材料収集の難しい風船太鼓1種類を取り扱うこととした。近年の絵本には、擬音語表現に注目したもの、楽器が登場するもの、唱え言葉や歌が歌われるもの、音楽会にちなんだストーリーなど音にまつわる様々な絵本があるが、風船太鼓の音や特色を活かせられる絵本として3冊の絵本が候補に挙がった（表1）。それぞれの絵本の活用の可能性を比較した結果、今回の実践では、幼児から小学校低学年までの対象年齢に合うことや、太鼓の種類が限定されていないこと、また、グループ活動および一斉活動としての発展性が最も見込まれる『ドオン！』の絵本をもとに、次章に示す内容と方法で風船太鼓制作と演奏の活動を学生と教員とで企画することとした。

4. 活動内容と方法

表2に示すのが今回のイベントの企画内容である。活動の中心に絵本を据えるため、タイトルを「ドオン！風船太鼓を作ろう&みんなでたたこう」と名付け、活動の流れを「導入」から「フィナーレ」まで筆者が段階的に設定した。学生たちは「導入」として「ミニシアター」を企画させた。前回のイベントでは、「楽器を見せる」「鳴らす」「材料を見せる」ことで子どもたちに導入を行い、ある程度の効果を得たが、今回は絵本をスクリーンに映し出し、本物の太鼓の音を聞かせながら絵本の読み聞かせを

表1 候補に挙がった絵本の例

題名・作者・出版社等	絵本のあらすじ	風船太鼓の活用の可能性
『ドオン！』 山下洋輔文、長新太絵 福音館書店、1995年	こうちゃんとおにのこドンが太鼓のたたき合いをする。それぞれのお父さんやお母さん、動物たちにまで太鼓のたたき合いが広まる。皆が集まつてたたき合っているうちにあるところで一斉に「ドオン！」と鳴り響く。皆で笑い合い、音を合わせることの面白さを皆で共有して物語は終わる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーと絵が分かりやすく、対象年齢にふさわしい。 ・擬音語が豊富であり、様々な太鼓の音が楽しめる。 ・登場人物が多く、グループに分けやすい。役になりきって楽器を鳴らすことができる。 ・全員で音を合わせると効果的な場面がある。
『ふしぎなたいこ』 新田新一郎文、田島征三絵 フェリシモ、2008年	たたけば鼻がによきによき伸びる不思議な太鼓を天狗様からもらった源五郎どん。自分の鼻を伸ばしてはならないという天狗様との約束を破つて太鼓をたたく。鼻はどんどん伸びていき、雲の上までたどり着く。雷さんが橋の欄干に鼻を結びつけてしまったことで物語は一転し、道徳的な結末へ向かう。日本民話。	<ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーと絵はわかりやすく、対象年齢にふさわしい。 ・和太鼓が用いられている。音は鼻が伸びる音と縮む音の2種類が考えられる。 ・太鼓を鳴らす役は一人であり、グループに分けにくい。 ・全員で音を合わせると効果的な場面は見当たらない。
『ピカゴロウ』 ひろただいさく、ひろたみどり作 講談社、2016年	かみなりの子どもが雲の上から落ちてきて、ひなちゃんの部屋に転がり込む。ピカゴロウと名付けられたかみなりの子は、空に戻るために太鼓を鳴らし雲を呼ぶ。小さな雲しか呼ばずに泣くピカゴロウをひなちゃんは励まし、一緒に大きな音を鳴らす。やがて大きな雲がやってきてピカゴロウは空に帰っていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーと絵はわかりやすいが、4~5歳までの幼児向き。5歳からの子どもは少し物足りない。 ・和太鼓が用いられている。決まったリズムで太鼓を鳴らす。場面ごとに強弱表現を工夫できる。 ・少なくとも2グループに分けられ全員で合わせると効果的な場面がある。

行うことで、子どもたちにいろいろな太鼓の音に親しんでもらい、太鼓への興味を引き出すところから始めることにした。それにより、子どもたちの「作ってみたい」「鳴らしてみたい」という意欲を喚起し、楽器制作はもとより今回の活動の目標でもある「発表会参加への動機付け」につなげたいとの意図が筆者にあった。企画当初、学生たちは登場人物を演じながら同時に太鼓を鳴らすという劇形式での実演を考えていたが、シアター形式による絵本の読み聞かせに太鼓の音を効果音的に付けるほうが、絵本の絵も活かされ、かつ子どもにも伝わりやすいのではないかとの話し合いにより、計画修正を行った。

制作後は学生の進行による「音遊び」の時間を設け、グループで円になって一人ずつ音を聴いてみたり、歌に合わせて鳴らしたりする活動を学生たちに企画させた。そのような方法で子どもたちに太鼓の鳴らし方やリズムに少しづつ親しませてから、絵本の担当場面に合うリズムの「練習」へ進み、「発表」に向けて子どもたちの意欲を徐々に高めていくことを目標とした。

さらに、前回のイベントにおいて「曲に合わせて自由に音を鳴らす」「立って体を動かしながら演奏する」活動は子どもたちの心身を解放し、音を皆で鳴らすことの楽しさをより実感できるものとして効果的であったことから、今回の実践では、集中力の必要な発表会を終えた後に「フィナーレ」として、音楽に合わせて自由に音を鳴らしたり動いたりしながら子どもたちの気分を発散させられるような身体表現の機会も設けた。

以上のように子どもたちの体験内容を段階的に設定し、各段階のねらいを踏まえながら学生主導で実践に当たることとした。

表2 「ドオン！風船太鼓を作ろう&みんなでたたこう」の企画内容

時間	段階・内容	実践者のねらい	担当と留意事項
13:00 (10')	始めのあいさつ 活動の趣旨説明	①子どもに学生の顔を覚えてもらい、安心して活動に参加できるようにする。 ②「太鼓」「手作り」に興味を持たせる。 ③活動の趣旨を保護者にも理解を促す。	進行 1名
13:10 (15')	【導入】 学生によるミニシアター 『ドオン！』	①いろいろな太鼓の音に親しませる。 ②太鼓作りに興味・意欲を持たせる。	朗読 1名 登場人物 13名 音響&PC 2名
13:25 (25')	【制作】	①材料と作り方を提示し、手順をつかませる。 ②制作状況を見守り、子どもも自ら制作できるよう に言葉がけや介入の仕方に留意する。 ③子どもが周りの人との関わりを育めるように必要に応じて取り持つ。	装飾 2名 お米配布 1名 風船張り 3名 側面固定 2名 マレット 2名
13:55 (5')	休憩・片づけ		グループ分けの環境設定を行う
14:00 (15')	【音遊び】 ・一人ずつ音を鳴らす ・音の回し合い ・早く鳴らす ・歌に合わせて鳴らす	①自分や友達の音を感じ取れるようにする。 ②遊びを通して楽器の鳴らし方に慣れさせる。 ③リズムや拍子に合わせて鳴らす楽しさを味わわせる。	子どもを約12名ごとに分け、各グループに学生が付き、音遊びを進行する。
14:15 (20')	【練習】 ・発表会の趣旨を説明し、グループごとに担当場面の役割を決める。 ・リズムを決めて鳴らす練習をする	①発表に向けて、役割（出番）を持つことにより意欲を持たせる。 ②子どもがリズムを自ら作って表現できるように働きかける。 ③リズムをグループで共有し、一緒に鳴らせるように練習を促す。	
14:35 (15')	【発表】 子どもたちと学生によるミニシアター『ドオン！』	①発表の場を楽しみ、練習通りに鳴らせるように呼び掛ける。 ②発表を通じて、皆で協力して仕上げることの楽しさを感じさせる。	グループごとに座る 朗読 1名 音響&PC 2名
14:50 (5')	【フィナーレ】 みんな踊ろう&鳴らそう 『さんぽ サンバVer.』	①全身を使って自由に鳴らすことにより気持ちを発散させる。	進行 3名
14:55 (5')	終わりのあいさつ	①言葉がけを通して、楽しさや達成感を感じさせ、今後の興味や関心へと広げる。	進行 1名 アンケート回収 1名
15:00	片づけ		

5. 実践後の学生の振り返り

児童館の協力のもと、2017年4月16日（日）にゼミナール2年生17名が図2のような会場で実践を行い、地元の子どもたち約60名とその保護者の参加があった。実践の模様をビデオで録画したものを作成した後、ゼミナールの授業において検証しながら、学生に実践の振り返りを行わせた。振り返りシートは表2に示す各段階とねらいに対して「とてもよくできた」～「全くできなかった」までの4件法で回答し、その理由を記述させる方法（匿名）を探った。前年度の実践では、振り返りシートの結果分析を筆者自らが行い、授業担当者として学生の学びや課題の傾向を把握するために活用した。その過程で確認されたのは、これらの調査結果の共有にこそ学生同士の学び合いを活発に促す可能性が含まれており、学生自身に同じ受講生たちの記述内容を分析、考察させることで各自の体験をチームとしての学び合いに昇華させる必要があるということであった。

そこで、今回の実践においては学生自らがKJ法により分析を行い、自分たちの学びや課題の傾向を把握し、皆で共有できるように「分析」「考察」「報告書作成」「発表」の時間を授業内に設けた。学生の分析と考察の結果は次のとおりである。調査実施と結果考察に際しては、関係者に研究の趣旨説明と協力依頼、個人情報保護の倫理的配慮を行った。なお、本稿では子どもの手作り楽器活動における演奏

体験を能動的に促すための取り組みに焦点を当てているため、制作活動等の分析考察結果については掲載しないこととする。

(1) 導入活動における学びと課題

導入活動である「学生によるミニシアター」への自己評価（図1）は「できた」が最も多く、他の2件にそれぞれ1名ずつの評価が見られた。この分析考察を担当した学生は、各評価の理由内容を「子どもの様子」「親子の様子」「学生の実演」「改善点」の4つのカテゴリーに分け、その総括として「まとめ」を記した（表3）。担当学生は、今回の導入活動の内容や方法は、子どもに「ストーリーへの興味」「太鼓や音への興味」をもたらし、親子でもそれらの「共有」や「コミュニケーション」を促す効果をもたらすものであったと捉えている。また、自分たちの実演に対しても「役割分担」「練習」「改善」に取り組んだことで成果が得られたことから、「PDCAサイクル」の重要性を述べている。その一方で、「子どもへの伝わりやすさ」を考えると「劇形式」で実演したほうが良かったのではないかという意見も一部あることに触れ、再実践の際の検討課題としたいとしてまとめている。

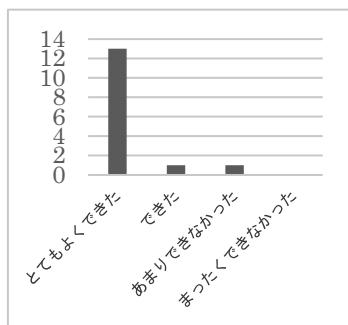


図1 導入活動の自己評価



図2 導入活動の実践の様子



図3 使用した太鼓

表3 導入活動の自己評価の理由についての学生の分析と考察⁽³⁾

【子どもの様子】
・「ドオン」と音がそろったときに子どもたちが見入っているのを感じた。[ストーリーへの興味]
・学生が鳴らす太鼓の音に反応して興味を持っている様子が見られた。[太鼓への興味]
・私たちが各自違う太鼓を持って音を鳴らしたので、いろんな音を知り親しんでもらえたと思う。[音への興味]
【親子の様子】
・私たちが太鼓を鳴らすと親子で「面白い音がするね」と会話するのが聞こえた。[音の共有]
・親子でわくわくしている顔や「すごい」という顔、集中している様子が見られた。[ストーリーの共有]
【学生の実演】
・役割分担しながら練習通りにできた。[役割分担] [練習]
・直前まで改善を重ねていたからうまくいった。[改善]
【改善点】
・効果音を付けるだけにしたことにより、子どもはプロジェクターの画面に見入っていた。[シアター形式]
・劇をした方が子どもにとって伝わりやすかったのではないか。[劇形式]
【まとめ】
・読み聞かせだけでなくシアターにすることで子どもの興味や親子間のコミュニケーションを促すことができた。
・実演に向けて事前の計画や打ち合わせを詳細に行うことで、一応の目的は達成できた。PDCAサイクルは大切。
・実演をさらにより良いものにするには、変更前の内容も再度参考にして検討を行う必要がある。

子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試み（1）

（2） 音遊びの活動における学びと課題

音遊びの活動に対する自己評価（図4）は「とてもよくできた」から「あまりできなかった」まで評価が分散している。この分析考察を担当した学生は、各評価の理由内容を「良かった点」「反省点」の大きく2つのカテゴリーに分け、その総括として「まとめ」を記している（表4）。担当学生は、今回の音遊びの内容や方法は、「なじみの歌」を用いることなどにより、子どもたちに「音への興味」を引き出し、「親・他の子ども・学生との関わり」をもたらす意図があったが、一方でこれらの活動を効果的に実践するには「発達段階」「スペース」「音響環境」への配慮が不足していたこと、そして、グループによってはこの活動を実践せずに発表会の練習から進めてしまったことへの反省から、子どもにとって「段階的な体験」の場がいかに大切であるかを改めて認識したことをまとめている。

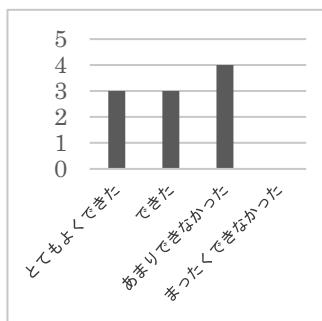


図4 音遊びの活動への自己評価

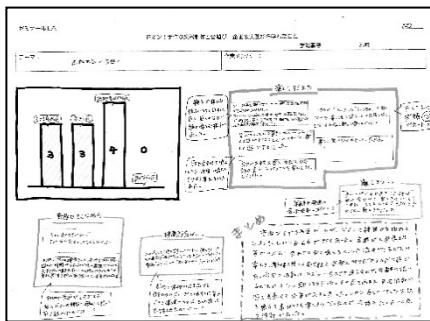


図5 学生の分析と考察の例



図6 発表活動の様子

表4 音遊びの活動への自己評価の理由についての学生の分析と考察

【良かった点】
・皆が知っている童謡から入ってリズム遊びをすることで活動に入りやすく楽しんでいたと思う。 なじみの歌
・自分の太鼓と友達の太鼓の音が違うことに気付き面白がっていた。 音への興味 他の子どもとの関わり
・太鼓を鳴らせない子も歌を歌って楽しんでいた。 発達段階 なじみの歌
・小さい子どもも親御さんと一緒に太鼓を鳴らす姿が見られた。 発達段階 親との関わり
・歌に合わせて太鼓をたたくときに子どもたちが私たちの動作を真似て遊ぶ姿が見られた。 学生との関わり
【反省点】
・歌に合わせて楽しそうにたたいていたが、しっかりリズムをたたくのは難しそうであった。 発達段階
・人が混雑しており隣のグループとの距離が近くで音が混ざり、うまく進行できなかった。 スペース 音響環境
・活動の順番を間違えてしまい、初めに発表会の練習をしてしまった。のちに気付いて音遊びを試みたが興味を持って取り組んでくれる子どもがあまりいなかった。 段階的な体験
【まとめ】
音遊びを行う予定だったが、発表会の練習から始めてしまったという反省が多く見られた。音遊びを発展させ、皆でリズムに合わせて音を鳴らすという流れが、子どもの楽しさ、興味を持って取り組む姿勢を作り出せるのだと感じた。今回の活動はリズムに合わせて鳴らすので、年齢の低い子どもには少し難しそうだった。その点を踏まえ再度、活動内容を考慮する必要がある。しかし、自分で作った太鼓を鳴らすことはとても楽しそうだったので次回に生かしたい。

（3） 練習活動における学びと課題

練習活動に対する自己評価（図7）は「できた」が最も多いが、他の2件にもそれぞれ4名ずつの評価が見られる。この分析考察を担当した学生は、各評価の理由内容を「良かった点」「反省点」の大きく2つのカテゴリーに分け、その総括として「まとめ」を記している（表5）。担当学生は、今回の練習活動の方法について、子どもにリズムを覚えさせるために「モデルの提示」「絵本の提示」「動作の提示」

を行い、子どもの発達段階や状況に応じて「方法の変更」「個別の援助」をすることで効果を得られたしながらも、グループによっては子どもの「発達段階」に応じた「リズムの難易度」を設定する必要や、声や音が行き届く「人数」「環境」への配慮を要するところもあったとして課題を提示した。

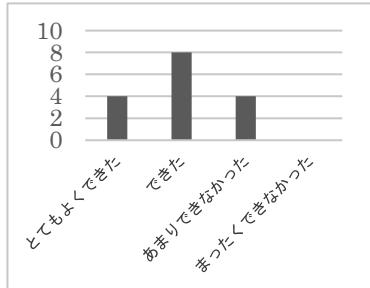


図7 練習活動への自己評価



図8 練習活動の様子



図9 練習活動の様子

表5 練習活動への自己評価についての学生の分析と考察

【良かった点】

- 最初に学生が見本を見せて、それを子どもたちに真似させて教えた、本番でもうまくいった。[モデルの提示]
- 絵本の場面を見せると、役割などが理解できたようだった。[絵本の提示]
- 動物役のグループだったので、子どもたちは鳴き声をまねるのが楽しそうだった。[声による表現の楽しみ]
- 動作を加えて読んでみると、子どもも打ち方が理解できたようだった。[動作の提示]
- 初めは絵本のリズム通りに教えていたが難しそうだったので、好きなように鳴らすように伝えた。[方法の変更]
- 練習時間の最後に「どこでリズムを鳴らすのか」をきちんと子どもたちに伝えるようにした。[タイミングの確認]
- リーダーが中心になって進めてくれたので、自分は子どもたちのそばでフォローしたり、風船が破れてしまった子に対応したりすることができたので良かった。[個別の援助]

【反省点】

- グループの子どもたち全員に呼び掛けて練習するという状況を作り出せなかった。[環境] [人数] [段階的な体験]
- 年齢が小さな子ばかりで、音を合わせるということが難しかった。[発達段階]
- 鳴らすリズムが難しくてなかなかうまく伝えられなかった。[リズムの難易度]
- 練習に飽きてしまっている子どももいるようだった。[発達段階] [モチベーション]

【まとめ】

子どもたちの年齢がどれくらいかによって、各グループで取り組みにも違いが見られた。うまく進められたグループでは、「良かった点」に見られるような方法の工夫を行っていた。反省の多いグループでは方法以前に、活動自体が子どもの発達段階よりも難しいものであり、グループ活動を効果的に進めにくい環境であったこともわかった。「声が届く環境」「音の聞こえる環境」はこういう活動形態の場合はとても大事だと思った。

(4) 発表活動における学びと課題

発表活動に対する自己評価（図10）は「できた」が最も多く、次いで「とてもよくできた」の評価であるが、否定評価も若干名見られる。この分析考察を担当した学生は、各評価の理由内容を「良かった点」「問題点」「改善点」「子どもの様子」の4つのカテゴリーに分け、その総括として「まとめ」を記している（表6）。担当学生は、発表活動の方法について、グループごとに順番を「待つ」「合わせる」という楽しみがあり、そのために「テンポ」「掛け声」「言葉かけ」に留意して効果を得られたグループもあったが、「タイミング」の提示方法や「練習時間」の確保、年齢に応じた「グループ編成」や音や声の行き届く「環境」については、音遊びや練習の活動とも連動し、改善の余地があることを示している。

子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試み（1）

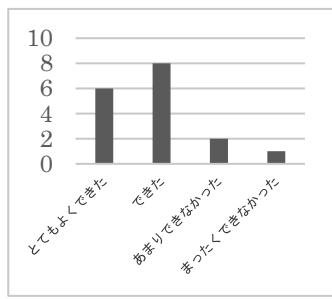


図 10 発表活動への自己評価

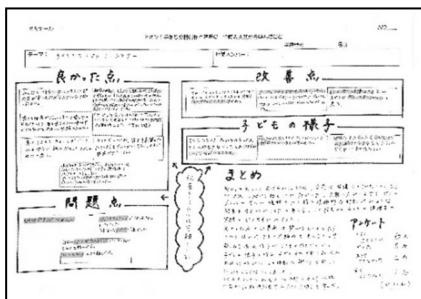


図 11 学生の分析と考察の例



図 12 発表活動の様子

表 6 発表活動への自己評価についての学生の分析と考察

【良かった点】
・皆で一緒にゆっくり行うことで全員が楽しみながらできていたと思う。[テンポ]
・皆で「せーのっ」と言って叩いたところは達成感を味わえたのではないか。[掛け声]
・順番が回ってくるのをドキドキして待ち皆で鳴らせた喜びを共有して笑顔になっていた。[待つ] [合わせる]
・4つのグループがそれぞれ練習したたき方でそろって発表ができていた。[練習成果]
・スクリーンの方に興味を持っている子もいたが、「次だよ」と声をかけたら気持ちが向いてくれた。[言葉がけ]
【問題点】
・鳴らすタイミングが子どもたちに把握されていなかった。[タイミング]
・練習よりテンポが速くなった。[テンポ]
・最後の「ドオン」が小さかった。練習時間が足りなかった。[練習時間の不足]
【改善点】
・鳴らすタイミングを絵を見て把握させるほうが子どもには覚えやすかったのではないか。[タイミングの提示]
・一つの会場に4グループが練習していて騒がしかった。声が届く環境をもっと考えるべきだった。[聴く環境]
・グループによって年齢がまちまちで、鳴らせるグループとそうでないグループの偏りがあったので振り分け方を工夫すべきだと思った。[グループ編成] [発達段階]
【子どもの様子】
・鳴き声を発する場面で役になりきっている姿が見られた。[演じる体験]
・少し恥ずかしがりながら発表している子どももいた。[人に見られる体験]
【まとめ】
・子どもたちはおよそ、この活動に興味を持って行おうとしていた。
・事前に計画していたことと状況が違ってきたときに私たちが臨機応変に対応する必要があるとわかった。
・問題点と改善点は関連があり、それらを改善すると、より子どもが楽しめる環境が作れるのではないか。

(5) フィナーレの活動における学びと課題

フィナーレの活動に対する自己評価（図 13）は「とてもよくできた」「できた」が最も多く、他の 1 件に 1 名の回答が見られる。この分析考察を担当した学生は、各評価の理由内容を「良かった点」「問題点」「改善点」の 3 つのカテゴリーに分け、その総括として「まとめ」を記している（表 7）。担当学生は、フィナーレの活動は「身体表現」「自由性」「音楽に合わせる楽しさ」などの点で「気分を発散させる」という当初のねらいを実現しうるものであったが、直径 20cm の円筒缶を持って歩きながら楽器を鳴らす動作が可能な「発達段階」や「楽器構造」であるかどうか、その

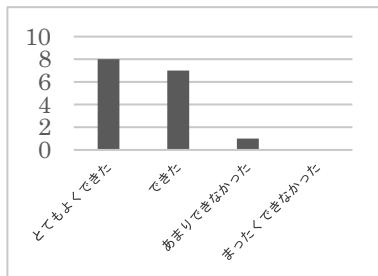


図 13 フィナーレへの自己評価

際の「スペース」「人数」に過不足はないかということへの配慮が足りなかつたことも反省点として挙げている。ただし、物理的な制約に関しては担当学生が実践中に気付き、歩かずともその場で表現できる身体活動へと自ら計画を修正し、実行に移すことができており、それが各学生の自己評価にも反映されている。

表7 フィナーレへの自己評価についての学生の分析と考察

【良かった点】
・計画通りに行かなかつたが歩かずできる活動へと臨機応変に対応したことで乗り切れた。 計画修正
・様々な動きを取り入れることで体を動かせ、子どもたちも楽しそうだった。 身体表現 自由性
・音楽に合わせて皆で一緒に動くことで集団での活動を楽しく行えていた。 音楽に合わせる楽しさ 集団活動
【問題点】
・子どもが動けずなかなか前に進むことができなかつた。 スペース 人数 歩く速度の違い
・歩きながら太鼓をたたくという動作が難しかつたかもしれない。 発達段階 楽器構造
・マレットを持ちながら、風船太鼓を引っ張って音を鳴らすのが難しそうだった。 楽器構造
【改善点】
・年齢の大きい子と小さい子、歩きながら鳴らせる子とそうでない子に分けてすれば良い。 発達段階
【まとめ】
・スペースが狭かつたことについては、当日予想以上の子どもが参加していたため混雑してしまつた。輪を二つ作るなどのびのびと活動できる配慮が必要であつた。
・歩きながら鳴らすことが難しい子どもについては、子どもの発達に合わせてグループ分けをするなど、全員が楽しめるようにしていくべきである。当日、実践中にそのことに気が付き、止まって音を鳴らすようにしたため、最後は全員で楽しむことができた。
・以上のことから私たちは実践を通して、異年齢での活動は子どもの発達を考慮して工夫しなければならないことがわかつた。先を見据えて計画をする必要があることがわかつた。

(6) 保護者へのアンケート結果からの考察

イベント終了時に、今回のイベントに対する保護者対象のアンケート調査を実施した。調査依頼が行き届かず14件のみの回収となつた。得られた回答結果は図14~16、表8・9のとおりである。活動内容と学生の進行や対応について4件法による評価とその理由について訊ねたところ、どちらも肯定的な評価を得られたが、「まあよかったです」への評価理由には改善に向けての課題も一部示されている。例えば活動内容については、対象年齢に適した難易度であることや子どもの気持ちや興味に沿つた体験であることが評価されているが、その一方で、絵本の選定や騒がしい環境における伝達方法が課題として挙げられている。また学生の進行や対応については、学生の表情や接し方が評価されている一方、騒がしい環境における伝達方法について留意する必要が述べられている。

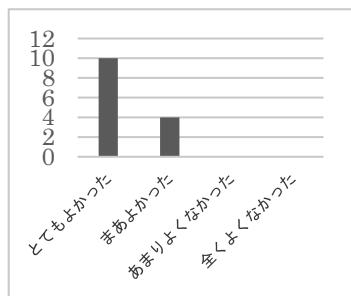


図14 本日の活動内容

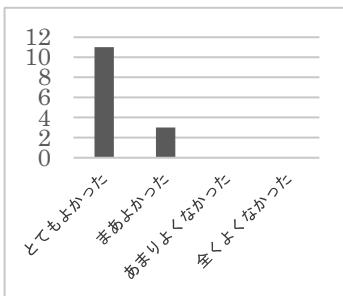


図15 学生の進行や対応

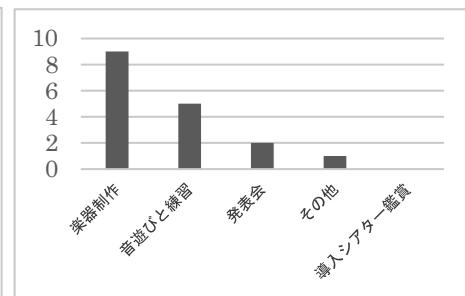


図16 子どもが楽しんでいた活動

表8 本日の活動への回答理由

【本日の活動内容が「とてもよかったです」理由】
・難易度がちょうどよい。
・最初怖がっていた子が楽しんでいた。
・オリジナルおもちゃが楽しく作れた。
・子どもが喜んでいた。最高でした。
【本日の活動内容が「まあよかったです」理由】
・声が少し聞こえづらかった。
・音遊びをもってしてほしかった。
・ミニシアターの絵本をもう少し子どもが好きそうなものにしてほしかった。

表9 学生の進行や対応への回答理由

【学生の進行・対応が「とてもよかったです」理由】
・皆の笑顔が良かったです。親切でした。
・子どもが安心する接し方だったので子どもが楽しめた。100点以上だと思います。
・子どもの誕生日に楽しく過ごせました。
・一生懸命やっている所がとても良かった。
・子どもが大好きなことが伝わってきた。
【学生の進行・対応が「まあよかったです」理由】
・少し騒がしかったので、もう少し仕切ってくれる人があるとよかったです。

6.まとめと今後の課題

児童館における子どもの手作り楽器の制作と演奏活動の企画と実践について、今回の取り組みでは、1日限りのイベントとして限られた条件のもとでも子どもたちの「作ってみたい」「鳴らしてみたい」という興味や意欲を引き出し、皆が一体感を共有できるような演奏体験を生み出せるようにすることを目標とした。そしてそのための方法として、活動の中心に絵本を据え、絵本の読み聞かせに合わせて子どもたちと学生が手作り楽器による音響を付けて発表を行う「視覚型」「参加型（協同創造型）」の発表会を考案し実践した。

これに対し、前章での学生の分析考察では、絵本の読み聞かせによる「導入」活動は子どもに「ストーリーへの興味」「太鼓や音への興味」をもたらすのに効果的であったが、それ以降の「音遊び」「練習」「発表」「フィナーレ」においては各活動のねらいを部分的に実現することができていたものの、幼児から小学生までの「発達段階」に見合った方法やグループ編成、声や音の行き届く「環境」、身体表現のための「スペース」などに課題が残ったことが示されていた。声や音の行き届く「環境」については、保護者へのアンケート調査の結果にも一部示されていたことから、グループ別での練習には適していない環境ではどのような練習方法や発表内容がふさわしいのかを考える必要があった。就学前施設で親子を対象に参加型コンサートを実施し、その効果や課題を検証した研究事例（山内 2016）では、「幼児にふさわしい環境面の構成の配慮」を行うことは「親子コンサートの質を高めるための重要な要素である」と述べている。事前の会場確認やスタッフとの連携により、「環境」を考慮した企画内容へと調整することが、今回の実践の場合、発表会に向けて子どもの能動性や取り組みの質をさらに高める上で必要であったといえよう。

なお、このイベントの3か月後、2017年7月に筆者が講師を務める親子対象の講座「お父さんと一緒に作って遊ぼう～風船太鼓～」において、同じ『ドオン』の絵本を用いて手作り楽器の制作と音遊びの実践を行った。2~3歳の子どもとその父親8組を対象に、声や音が十分に行き届く環境のもと、2度目の実践となる学生たちは非常に落ち着いて実演ができていた。「PDCAサイクル」を通して得られた実践の手立てに対する共通理解が、学生たちの働きにわずかなりとも効果を生んでいる様子であったことをここに付記しておく。

註

(1) 林 (2013) によると、音楽分野でのアウトリーチ (outreach) とは、「音楽家や音楽団体・機関が、普段音

楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及すること」であり、「音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的な活動がスタンスの特徴」とされる。このような活動が1990年代後半に日本で積極的に行われるようになった背景には、1998年告示の学習指導要領において総合的な学習や中学校での和楽器の学習が導入され、外部の音楽家が授業に協力する機会が増えたこと、1980～90年代に公立文化施設の急増に伴い音楽活性化事業の取り組みが活発になったこと、1998年のNPO法施行によりアウトリーチの供給側の幅が広がったこと、プロの演奏団体が存続をかけて聴衆開拓に踏み出したこと等が挙げられる。

(2) 1999～2015年まで国内の様々な地域のホールで開催してきた「月猫えほん音楽会」では、外国の絵本や日本の民話などの絵本をもとにプロの方々による朗読（能祖将夫）、ジャズピアノ（佐山雅弘）、パントマイムなど多感覚的なパフォーマンスが展開され、多くの親子を魅了してきた。筆者も2013年に滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールで同音楽会を鑑賞し、「参加型」および「視覚型」コンサートの魅力を体感することができた。

(3) 枠内のキーワードは学生の記述内容を筆者が補足、概念化したもの。表4～7も同様。

引用文献

- ・山本敦子（2017）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（1）—学生の実践の振り返りをもとに—」『高田短期大学紀要第35号』：53-64
- ・山本敦子（2018）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（2）—楽器の特徴や活動対象年齢の分析をもとに—」『高田短期大学紀要第36号』：45-56
- ・山本敦子（2018）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（3）—保育実践及び子育て支援への展望—」『高田短期大学育児文化研究第13号』：37-48
- ・山内信子（2016）「就学前施設の音楽アウトリーチ活動における演奏者と聴衆の相関関係に関する一考察」『聖和短期大学紀要1号』：59-68
- ・長崎結美（2016）「乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性—保護者を対象としたアンケート調査結果から—」『帯広大谷大学地域連携推進センター紀要第3号』：5-13
- ・荻原恵里・木村文子（2018）「幼稚園における音楽アウトリーチの可能性」『幼年教育WEBジャーナル第1号』：2-12
- ・林睦（2013）「音楽教育におけるアウトリーチを考える」『音楽教育実践ジャーナルvol.10 no.2』：6-13
- ・管道子（2008）「身体表現を取り入れた参加型音楽コンサートの可能性—カノンの理解を目指した「追いかげっこしよう」の事例から—」『和歌山大学教育学部実践総合センター紀要No.18』和歌山大学教育学部：121-129